始まりのない世界について
わたしのトマス・アクィナス頌　第二章

西　藤　　洋

はじめに

『ヨハネによる福音書』には以下のようなことばが記されている。

父よ，今，御前でわたしに栄光を与えてください。世界が造られる前に，わたしがみもとで持っていたあの栄光を。（17:5）

これは，

わたしは父のもとから出て，世に来たが，今，世を去って，父のもとに行く（16:28）

と弟子達に告げた後，イエスが，天を仰いで語ったことばだという[1]。

さて，『福音書』の一節を引用したが，それは，記されていることばがどのような福音をわたし達に伝えているか，そこに踏み込み，なにかを述べようとしてのことではない。そのようなことは，わたしの意図するところを，また，わたしのなしうるところをはるかに超えている。にもかかわらず，こうして引用したのはそのなかに，「世界が造られる前に」という表現が織り込まれているからである。つまり，この世界には〈始まり〉があったと述べられているからである。〈造られる前〉があるということは，造られた世界には〈始まり〉があったということにほかならない。世界は，果てしない以前からずっと在りつづけているわけでないとされているのである。そして『聖書』には，このように，世界には〈始まり〉があったと語ることばが，他にもいくつも見出される。たとえば，同じ『ヨハネによる福音書』のすこし後には，

父よ，わたしに与えてくださった人々を，わたしのいる所に，共におらせてください。それは，天地創造の前からわたしを愛して，与えてくださったわたしの栄光を，彼らにみせるためです。（17:24）

---

[1] 以下，聖書に記されていることばの引用は，日本聖書協会『聖書・新共同訳』（2011）によっている。

と記されており，使徒パウロの『エフェソの信徒への手紙』にも

> 天地創造の前に，神はわたしたちを愛して，御自分の前で聖なる者，汚れのない者にしようと，キリストにおいてお選びになりました。(1:4)

と語ることばが見出される[2]。

神は，永遠なる存在である。その神にすべてを負っているこの世界は，しかし，果てしない以前からずっと在りつづけている世界，もしくは〈始まりのない世界〉ではなく，〈始まり〉をもつ世界であるということばが，あるいは教えがいくども記され，そして説かれているのである。

この教えをめぐっては，しかし，異が唱えられることがすくなくなかった。12世紀の南フランスにはアルビ派と呼ばれる教団が現れ，相容れない教義を，マニ教のながれを汲むともいわれる教義ひろめようとした。この世界は，ただひとつの神にそのすべてを負っているのではない。霊界を創る善神と物質界 …… ひともそこに隷属させられている …… を支配する悪神がおり，世界は，物質界を解放しようとする善神とそれに逆らう悪神の間で絶えることなくつづいている相剋のあらわれにほかならないと説いて多くの人びとを惹きつけたとされる。これに対してカトリック教会は1215年，公会議（第四ラテラノ公会議）を招集して次のような教令を発した。

> 唯一の真なる神が存在し，…… そのかぎりない力によってなにものにも依拠することなく霊の世界と物質の世界を時のはじめに創造したことを …… わたし達は堅く信じる。

教会が認めているのはどのような教えか，それを改めて宣言し，アルビ派の異端を断罪しようとしたのである[3]。ここに記されている「時のはじめに（*ab initio temporis*）」という表現には，後にも触れるように，いく通りもの解釈があるかもしれないが，ここでは，世界の創造とともに時間も造られ，そして経過し始めたと解しておく。なお，この公会議から六百年あまり後に開かれた第一ヴァティカン公会議（1869~1870）においても，「時のはじめに」という表

---

[2] 他にも，天地には，あるいは世界には〈始まり〉があったと物語ることばが見出される。『箴言』(8:22,24~26）はそのひとつであり，次のようなことばが記されている。「主は，その道の初めにわたしを造られた。いにしえの御業になお，先立って。」，「わたしは生み出されていた深淵も水のみなぎる源も，まだ存在しないとき。山々の基も据えられてはおらず，丘もなかったがわたしは生み出されていた。大地も野も，地上の最初の塵もまだ造られていなかった。」

[3] 傍点，筆者。なお，ターナーはこの教令の上記引用箇所に，次のような英訳を与えている。We firmly believe …… there is only one true God …… who by his almighty power at the beginning of time created from nothing both spiritual and corporeal creatures ……. Tanner（1990）, PP. 230~231.

現も含めて上記とほぼ同じ内容の教令が発せられている[4]。また，さらに下って20世紀中葉，1950年にも，教皇ピウスXII世（在位1939~1958）は回勅のひとつで，世界には〈始まり〉はなかったとする主張に触れ，それは誤りであり，教会は容認しないと述べている[5]。このようにカトリック教会は，世界には〈始まり〉があったとする教えに異を唱える者を遠い以前からくりかえして牽制し，断罪してきたのである。

にもかかわらず，異が唱えられることは絶えなかった。アルビ派の一掃が試みられた12世紀から世紀が改まり，13世紀になると，つまり，トマス・アクィナスの世紀になると，今度は哲学者の間に，この教えに対して異を唱えているとみなされても仕方のない主張をなす者があらわれた。やがて異端として断罪される論を立てる者があらわれたのである。わけても，パリ大学人文学部の哲学者の間に。スペイン・コルドバに12世紀に生まれたイスラム思想家アヴェロエス（イスラム名イブン・ルシド，1126~1198）の註解をアリストテレスの解釈として確かなものとして受容し，そのうえに論を立てようとしたので，ときにアヴェロエス派，もしくはラテン・アヴェロエス派と呼ばれることのある哲学者達である[6]。

無論，この世界には〈始まり〉があったとする教えに背を向けた言動が正面切ってなされることがあったわけではない。けれども，後にもう一度，触れるように，人文学部の哲学者達，とりわけブラバンのシゲルスは，世界が，〈始まりのない世界〉であったとしても，格別の矛盾は生起せず，したがってそれはありえないことではない。すくなくとも論理的には否定できないと説いた。たとえそれが，神によって啓示されたところであり，偽りではありえないとされる教えと相容れないとしても，理性の導くところにしたがうかぎり，この世界が〈始まりのない世界〉であるという可能性を否定することはできないとするかれらの論は，啓示の告げるところと，それに真っ向から対立する言明がふたつながらに真でありうると主張しているにひとしい。かれらのそのような言動は，それゆえ，カトリック教会の憂慮するところとなり，やがて（1270年），パリの司教ステファン・タンピエによる断罪を招き寄せた。タンピエによって異端であると断罪された13箇条の命題のなかには，この世界には，〈始まり〉はないと説くものが含まれていたのである[7]。

この，1270年の断罪は，しかし，ラテン・アヴェロエス派の哲学者達に異端とされた命題を放棄させるにはいたらなかったとみられる。というのも，それからいくらも経たない1276

---

[4] Tanner（1990）, PP. 805~806, Vollert（19643）, PP. 3~4.

[5] 回勅*Humani generis*，ディンツィンガー（1982），603頁。

[6] ファン・ステンベルゲンは著書，『十三世紀革命』においてかなりの紙幅を割き，この呼称は誤解を招くものだと指摘している。そして，ボナヴェントゥーラやアウベルトゥス・マグヌスの，また，トマスのキリスト教的な，もしくは穏健なアリストテレス説と対比させようとするなら，こうした哲学者達の見解は〈異端的なアリストテレス説〉，あるいは〈根底的アリストテレス説〉と形容されるのが適当であろうと述べている。Van Steenberghen（1953）, PP. 103, 126, 134~136, 141.

[7] Wippel（1977）, P. 171.

年9月2日，非公開の場で，あるいはひそかに，なにかについて議論したり，教えたりしてはならないという禁令がパリ大学で通達されているからである[8]。わざわざ禁令を出したわけだから，1270年の断罪で異端とみなされた命題が，あるいはそこに含意される見解がその後も，ただし，公の場は避けながら議論され，教えられていたとみてよいであろう。つまり，人文学部の哲学者達は，もしくはラテン・アヴェロエス派の哲学者達は自らの見解を放棄したり，口を閉ざしたりしてはいなかったにちがいない。しかも状況は，教会を，とりわけ教皇ヨハネスⅢ世（在位，1276~1277年）を深く憂慮させるほどに，深刻になっていたようである。

教皇はそれゆえ，パリ大学の，とりわけ人文学部の哲学者達によって打ち建てようとされた命題のなかに，異端のおそれのあるものがないかどうか，再度，確認するよう要請した。その要請を受けたのは，やはり，パリ司教ステファン・タンピエである。そして1277年，219箇条もの命題が異端であるとして断罪された。もっとも，同じ命題がくり返して断罪されている例もあり, 219という数を額面どおりに受けとめる必要はないといわれる。そのうえ，なにゆえに異端とみなされたのか，首を傾げてしまう命題も含まれているという[9]。断罪はかなり性急になされたのであろう。にもかかわらず，きわめて厳しい処罰がともなった。異端とされた命題を講じた者はもとより，それを擁護しようとした者，さらには，聴講しようとした者まで，破門されたという。ウィッペルのいうように神学や哲学の領域で表明された見解への断罪としては，13世紀を通してみて，さらにいえば，中世全体を通してみても，この，1277年のそれ以上に厳しい例はなかったといってよいかもしれない[10]。

なお，断罪された命題のなかには，何ものにも依拠することなく，あるいは何ものも介することなく，新たになにかを造り出す力が神に具わっていることに疑問を投げかけるものが含まれているという。神のなしうるところにそのような疑いを抱くことは，いずれ，世に在る被造物はことごとく，その存在を根源的に，神に負っているという教えに疑問を投げかけることにつながりかねないと懸念されたからであろう[11]。

同様の断罪はまた，オックスフォード大学を管轄するカンタベリー大司教ロバート・キルワービーの手でも行なわれた。それも，タンピエによる二度目の断罪のわずか11日後に行なわれ，30箇条の命題が異端であるとして断罪されている。

ところで，ラテン・アヴェロエス派に対してこのように厳しく相対したのはカトリック教会だけではない。いく人かのパリ大学神学部の教授をはじめとする神学者達も厳しく対峙し，かれらの見解を真っ向から否定する論を立てた。ボナヴェントゥーラやジョン・ペッカムを

---

[8] Wippel (1977), PP. 185~186.
[9] Wippel (1977), P. 171.
[10] Wippel (1977), P. 169.
[11] Wippel (1977), P. 188.

はじめとする神学者達，アウグスティヌス派と呼ばれ，また，保守的とみなされることもある神学者の一団である。後述するように，この世界に〈始まり〉のあることは，神の啓示の告げるところであり，それゆえ，偽りではありえないと確信しうるだけでなく，論証されうる真理でもあると，かれらは説いた。この世界が〈始まりのない世界〉であること，それはありえないと主張したのである。

なお，パリ大学のこうした神学者のひとりにガンのヘンリクスがいる。ヘンリクスは，どの修道会にも属さない教区聖職者出身の神学部教授であったが，その説くところからするとアウグスティヌス派 …… 多くはフランシスコ会の修道僧であった …… のひとりであったとみられるという。保守派のひとりとみられる，そういってもよい。そして，教皇ヨハネスⅢ世の要請に応えるにあたってステファン・タンピエは，いく人かの神学者を指名して意見を求めたが，ガンのヘンリクスはそのひとりであったとされる。ヘンリクスはまた，219箇条もの命題を異端とした文書の起草にも携わったという。

このことは，それゆえ，アウグスティヌス派ないし保守派の見解が1277年の断罪の背後にあって，どのような命題を異端とみなすかについての判断を大きく左右していた可能性のあることを示している。断罪全体がかれらによって画策された出来事であったとまではいえないとしても[12]。また，稲垣の指摘するように，異端か否かの判断も神学上や哲学上の注意深い検討と真剣な討論を経てなされるというより，党派的な思惑に振り回されてなされてしまう，そんな状況になりつつあったのかもしれない[13]。神学者と哲学者が，あるいは，神学部の教授達と人文学部の教授達がたがいに啓発し合うという雰囲気は失われ，猜疑心だけが双方にわだかまっていた，ウィッペルがそう表現する状況である[14]。

さて，トマスが，ドミニコ会総長ヴェルチェリのヨハネスの要請にしたがって二度目の神学部教授職に就くべくパリに赴いたのは1268年秋のことであった。つまり，ラテン・アヴェロエス派，アウグスティヌス派がそれぞれ，人文学部，神学部に陣取り，たがいに相容れない論を立ち上げて譲らない，したがって，ドミニコ会に属する学僧達にも争点となっていることがらについていたずらに沈黙しているのではなく，自らの見解をはっきりと表明することが期待される，そういう状況のなかにやって来たのである[15]。そして，両派の見解が真っ向

---

[12] Wippel (1977), P. 195.
[13] 稲垣(1992), P. 157.
[14] Wippel (1977), PP. 200~201.
[15] このおり，トマスが対峙しなければならなかったのは，ラテン・アヴェロエス派の哲学者やアウグスティヌス派の神学者達だけではなかった。1257年，フランス国王ルイⅨ世によってパリから追放され，しばし鳴りを潜めていたものの，再び，ドミニコ会をはじめとする托鉢修道会への批判を公然と口にするようになっていたサンタムールのギョームやその同調者ジェラール・ダヴェヴィユ，リジューのニコラにも対峙しなければならなかったのである。なお，このことの経緯については稲垣(1992), PP. 144~153に詳しい。また，筆者も簡潔に触れたことがある。西藤(2016), PP. 32~33。

から衝突していたのは，すくなくともその一つは，この世界が〈始まりのない世界〉であることは可能であり，論理的には否定できないのか，それとも，この世界に〈始まり〉のあったことは神の啓示であるばかりでなく，論証されうる真理でもあり，この世界が〈始まりのない世界〉であること，それはあえりえないのかという論点ないし問であった。

自らに期待されているのが何であるか，トマスは無論，承知していたはずで，そのことだけからしてもこの論点をめぐる論争を傍観してはいられなかったにちがいない。けれどもそれは，状況がこのようになるよりずい分と以前から，トマスも深く関心を寄せていた論点であった。事実トマスは，1250年代前半，まだ若き教授候補（*baccalaureus*）であったときに，また，1260年，最初のパリ大学神学部教授職を辞してナポリに帰り，著作に多くの時間を割いていたおりに，すでに，この論点をめぐって筆を執り，自身の理解を書き著している。そして，サイリル・ヴォラートにしたがっていえば，それらも含めてその生涯に世に問われ，今日に伝えられている論考はすくなくとも以下の七編にもなる[16]。

これらのうち，

De aeternitate mundi, contra murmurantes（1268~1272），『世界の永遠性について：つぶやく者どもに対して』

は，ただひとつ，この論点についての自らの理解を示すこと，それだけのために執筆されたエッセイないし小論（*opusculum*）である。他は，さまざまの論点を幅広く扱った以下の書物のなかに，その一部として書き著された論考である。

Scripta super Libros Sententiarum（1252~1256），『命題論集註解』
Summa contra gentiles（1259~1264），『対異教徒大全』
De potentia Dei（1265~1266），『神の能力について』
Summa theologiae, Ia,（1266~1268），『神学大全』第Ⅰ部
Quaestiones quodlibetales（1270），『任意討論集』
Compendium theologiae ad Fratrum Reginaldum socium suum（1271），『神学要綱：僚友なるレギナルドゥス修道士のために』

なお，それぞれの原著タイトル，邦語標題，そして執筆されたと推定される時期は，稲垣の

[16] Vollert（1964）, P. 14.

手になるトマスの著書目録によっている[17]。

〈始まりのない世界〉はありうるのであって，すくなくとも論理的には世界がそのようである可能性は否定できないのか，それとも，この世界に〈始まり〉のあったことは論証しうる真理でもあり，〈始まりのない世界〉であること，それはあえりえないのかという論点ないし問は，自身が構想し，構築しようとした神学，哲学にあって，ぜひとも向き合わねばならないもののひとつだとトマスは自覚していたにちがいない。まだ若き教授候補であったときから死期が間近にせまったときまで，たび重ねて自らの理解を書き著そうとしたのは，このことを証するものといってよいであろう。

トマスがこの問にどのように向き合い，どのように答えたか，また，けっして陥ってはならないと諭したのはどのような錯誤であったか，以下は，それらをこれらのエッセイや論考から読み取ってみようとするこころみである。

一　トマスの示そうとしたこと

端的にいえば，下記のような申し立てがなされるとき，わたし達はそれに同意するほかないということ，それが，いくつものエッセイや論考を通してトマスが示そうとしたことであったとみられる。

この世界は，〈始まりのない世界〉ではありえないと論証することはできない。

今，申し立てという言葉を用いたが，それは，この世界が〈始まりのない世界〉であるという可能性を否定することは，論理的にはできないということが述べられているからである。あるいは，神の啓示とされるところに，それゆえ教会がくりかえして説いてきた教えに，つまり，この世界は，〈始まり〉のある世界であるという教えにそぐわない陳述だというほかないからである。そのような陳述ないし申し立てであるにもかかわらず，トマスは，わたし達はそれに同意するほかないということを示そうとしたとみられるのである。この申し立てに異議が唱えられるときには，どうあれそれは何らかの錯誤の上に唱えられたものであり，したがって決定的で，覆しようのない（*conclusivus*）論ではないにちがいない。トマスが意図したのはそのことをあきらかにすることであったといってもよい。

なお，始まりがある，あるいはないというときの〈始まり，*incoepisse*〉という語がどのような意味で用いられているかについて，ここでひとこと，付言し，陥りがちな誤解をあらかじめ解いておきたい。それは，すべてに先行して，あるいはすべてから独立して時間が経過

[17] 稲垣（1999），240~268頁。

しており，その軸上のある時点で何かが，とくに世界が存在し始めたと解されてはならないということである。というのも，世界が未だ存在しておらず，それゆえ，さまざまに運動するいかなる被造物も存在していないにもかかわらず，時間だけが存在し，経過するということはありえないからである。

たしかに，世界に在るもののあらゆる運動は，すなわち場所的な移動と，生成，増大，減少，消滅等の変化 …… それらすべてが運動と呼ばれた …… は，時間の経過のなかで生起し，時間の経過を尺度（*mensura*）として認知される。このことは，しかし，ものの場所的な移動や生成，増大，減少，消滅等の変化があってはじめて，どれだけかの時間の経過があったことが認知されるということも意味する。つまり，さまざまに運動し，変化するものが何もないときには，あるいは，世界というものが存在していないときには，時間の経過も認知されえない。換言すれば，すでに述べたように，世界というものが未だ存在しておらず，運動するいかなる被造物も存在していないにもかかわらず，時間だけが存在し，経過するということはありえないのである。

もちろん，なにかの，とくに世界の存在に〈始まり〉があるとすれば，それは，世界が非存在につづいて存続するようになったということである。そして時間も，世界とともに造られ，経過し始めたと解された。すくなくとも中世スコラ学にあってはそのように解された。事実トマスも，いくつもの論考に，時間は，世界の創造 …… それがいつなされたにせよ …… に際して諸々の被造物とともに神によって造られ，経過し始めたと解していることを書き記している[18]。

〈始まりのない世界〉とは，それゆえ，時間も含めてすべてが果てしない以前に造られ，絶えることなく在りつづけている世界をいう。しばしば使われた表現を用いて，〈永遠この方（*ab aeterno*）〉在りつづけている世界といってもよい。わたし達は同意するほかないとトマスがみている上記の申し立ても，したがって，

この世界が，永遠この方，在りつづけているということはありえないと論証することはできない

と言い換えてもよい[19]。

---

[18] たとえば，*Summa contra gentiles*, II-35において，また，*De potentia Dei*, q-3, a-17においてもこのように述べられている。Vollert（1964）, PP.36, 53.

[19] ウィッペルによればアウグスティヌス会の修道僧でトマスの弟子のひとりといわれることもある学僧，ローマのガイルズ（Giles of Rome, 1243頃～ 1316，ラテン語名アエギデウス，Aegidius）は，この世界が〈始まりのない世界〉でありうるか否かについてひとがもちうる見解は以下の三つに分たれると説いたという。

（ｉ）　この世界は，〈始まりのない世界〉でありうる。

（ii）　この世界は，〈始まりのない世界〉ではありえないと論証することはできない。

ところで，トマスと同時代に，この世界に〈始まり〉のあったことは神の啓示の告げるところであり，それゆえ，偽りではありえないだけでなく，論証されうる真理でもあると説く人びとがいたことは先に紹介したとおりである。この世界は，〈始まりのない世界〉ではありえないと論証することができる，そう述べる人びとがいたといってもよい。とりわけ神学者の一部に。そしてかれらが，その論証なるものを事実，なしえたと自負し，主張しているとすれば，それは，わたし達は同意する他ないとトマスがみている申し立てを真っ向から否定する主張であり，トマスの看過しうるところではない。トマスは，それゆえ，かれらのそのような主張や自負は，何らかの錯誤にもとづくものであり，したがって決定的なもの，あるいは覆しようのないものとはいえないこと，それをあきらかにしなければならないと期していたにちがいない。

なるほど，この世界に〈始まり〉があったことは偽りではなく，真であるかもしれない。ひとが，ただし，そのように確信できるとすれば，それは，神の啓示の告げるところであるとされているがゆえであって，論証されているがゆえではない。論理に忠実であろうとするなら，わたし達は，むしろ，この世界は〈始まりのない世界〉ではありえないと論証することはできないという申し立てに同意するほかない。人びとに，わけてもいく人かの神学者にそのことを説き聴かせ，理解させねばならならず，トマスはそれを，自らにあたえられた使命のひとつであると受けとめていたといってもよかろうか。そして，後にみるトマスの言葉を先取りしていえば，この使命をまっとうすべく，とくに強くトマスを突き動かしたのはつぎのような懸念であったとみられる。すなわち，論理に忠実ではなく瑕疵のある論を，あるいは論理を踏み外した論をもてあそぶことが見過ごされてしまうなら，不信の徒から嘲りを買い，神学者達の多くもその成員である修道会が負っているつとめ，かれら不信の徒をキリスト教の信仰に導くというつとめを果たすことが妨げられてしまいかねないという懸念である。トマスは，それゆえ，〈始まりのない世界〉はありうるのか，それとも，ありえないのかという問に，まだ若き教授候補であった頃からたゆむことなく向き合いつづけ，いくつもの

（iii）　これまでのところ，この世界が〈始まりのない世界〉ではありえないと論証されたことはない。

これら三つのうちの（ii）は上記の申し立てにほかならない。そしてトマスが，この申し立てにひとは同意するほかないとみているとすれば，（iii）に述べられているところについても，そのようであるのは当然だとみなすはずである。（i）についてはどうか。なるほど，「aはbのようであり る」という申し立てと「aはbのようではありえないと論証することはできない」，もしくは，「aはbのようではありえないと言い切ることはできない」という申し立てが告げるところそれ自体に違いはないかもしれない。けれども，（i）は（ii）より一歩，踏み込んだ陳述であると受けとめるひともいるかもしれない。そして，トマスがそのことを意識しつつ，（i）のように表明された申し立てについてもわたし達は同意するほかないと明言していたかどうかについては，後にこころみるように，その説いたところを注意深くたどってみなければならない。

なお，ガイルズ自身は（i）をよしとした。そして，一時，パリ大学神学部を追われたのだという。1270年の，あるいは1277年の断罪に触れるとみなされたからかもしれない。Wippel（1981），P. 22。

ものエッセイや論考を書き上げるよう，うながされたのだと思われる。

二　被造物のことごとくが常に存在していたのであるか

そうしたエッセイや論考のひとつ，*Summa theologiae*の緒言にトマスは，「公教的真理（*catholicae veritatis*）」を教えようとする者のつとめは，

> キリスト教に属する諸般のことがらを，まさしく初学者たちの教導に適応するところに従って告げる

ことにあり，それを果たすべく執筆されたのがこの書物であると述べている。この，途方もなく浩瀚で，それを手に取ろうとするとき，わたし達が思わず，たじろいでしまうほどに巨大な知的構築物は，実は，初学者のために構想されたものだと語っているのである。パウロのいう乳飲み子のような初学者のために，すなわち，まだ固い食べ物を口にすることのできない乳飲み子のような初学者のために構想されたのだと[20]。

なるほど，いたずらな煩雑さや重複のゆえに巨大な書物になっているのであれば，初学者でなくとも読者は困惑させられ，やがて，倦んでしまうにちがいない。*Summa theologiae*は，しかし，そうした煩雑さや重複は避け，平明かつ直裁な仕方で文章が組み立てられている。そしてなにより，そこには，多年，積み重ねられた思索の成果が余すところなく，また，系統立てて収められている[21]。

そこで，先の申し立てにわたし達は同意するほかないということをトマスがどのように示しているか，それをまず，*Summa theologiae*によりながら跡づけてみることにする。必要に応じて他の論考も参照しながら。ただし，*De aeternitate mundi*については，後ほど，節を改めて，このことがどのように論じられ，示されているか読み解いてみる。このように，*De aeternitate mundi*を，*Summa theologiae*をはじめとする六編の論考と別途に扱うことにはふたつの理由がある。

*De aeternitate mundi*は，この世界が，〈始まりのない世界〉であることは可能であり，すくなくとも論理的には否定できないのか，それとも，この世界に〈始まり〉のあることは，神の啓示であるのみならず，論証しうる真でもあり，それゆえ，この世界が〈始まりのない世

---

[20] 『コリントの信徒への手紙　一』3:1~2，Aquinas, Thomas, *Summa theologiae* 1, Gilby, T. ed. and trans, PP. 2~3，トマス・アクゥイナス『神学大全　第一冊』高田三郎訳，1~2頁。

[21] すなわち，*Summa theologiae*は三部からなっているが，それぞれは「第一に神について（第一部），第二には理性的被造物の神への運動について（第二部），第三にはキリスト……即ち，人間でありたもうかぎりにおいて，我にとっての，神に赴くための道なる……について（第三部），論ずる」という構想のもとで系統立ててつづられているのである。Aquinas, Thomas, *Summa theologiae* 2, Mcdermott, T. ed. and trans., PP. 2~3, トマス・アクゥイナス『神学大全　第一冊』，高田三郎訳，34頁。

界〉であることはあえりえないのかという問をめぐってラテン・アヴェロエス派，アウグスティヌス派がパリ大学を二分して対峙するという緊張した状況の中で執筆されたエッセイである。それぞれの派にあってかたくなに自説に固執する者どもにいらだちながら，それでもそうした者どもに自らの理解をしっかりと示し，説き聴かせねばならないという意気込みを感じさせるエッセイでもある。今，「者ども」という言い回しを用いたが，それはこの論考の副題，〈つぶやく者どもに対して（*contra murmurantes*）〉に使われている表現だからである。ただし，ブラディにしたがっていえば，この副題は，トマスが自らつけたものではなく，後のだれかが加筆したものではないかという[22]。いずれにせよ，しかし，1268年から72年までの間と推測される執筆年からみれば，*De aeternitate mundi*は，この問をめぐってトマスの思索のたどりついたところがそこに記されたエッセイだとみてよいであろう。それが，別途に扱う理由のひとつである。そして後に触れるように，他の六編以上に踏み込んだ論述がなされているとみられること，それがもうひとつの理由である。*De aeternitate mundi*には，それゆえ，既述のように，後ほど，節を改めて，しっかりと向き合ってみたい。

さてトマスは，*Summa theologiae* I-46-1，「被造物のことごとくは，つまり世界（*mundus*）と呼ばれているところのものは常に存在していたのであるか」という問への答のなかで，この世界には，「始まりというものがあったわけではなく，それは永遠この方（*ab aeterno*），存在していた」とも考えられるとするいくつもの主張に触れ，まずは，それらはいずれも論証されてはおらず，したがって，覆しようのないものとはいえないということを示そうとしている。その際，トマスがよっているのは，何かが始まりをもたず，永遠この方，在りつづけているとすれば，それは，神が，その何かの存在を必然なるものとして意志している場合においてのみであるという教理である。そして，

> 神の意志することの必然なるものとしては，神自身以外にはない。

したがって，この世界は，神によって必然なるものとして意志されたとはかぎらないとみなければならない。むしろ，

> …… 世界は，却って，神がそれの存在することを意志する，まさにそれだけのあいだ存在する。…… 世界が常に存在している〔としてもそのことは〕，…… それゆえ，必然的なことがらではない。だからして，それはまた，論証的に証明されることのできないことがらなのである

[22] Brady（1974）, PP. 141~142.

と承知するよう説いている[23]。

トマスはさらに，この世界は永遠この方，存在していたとも考えられると主張する人びとがしばしば援用している論，すなわちアリストテレスの論も，そのような主張にしっかりとした論拠を与えるべく立てられたものではないと指摘している。このことはアリストテレス自身が認めていることである。事実『トピカ』第一巻においてアリストテレスは，世界は，あるいは宇宙は，永遠この方，在りつづけているかという問に触れ，このようにことがらの大きな問については，しかりと答えるにせよ，否と答えるにせよ，なにゆえにそうであるかを曖昧さの一切，残らないような仕方で示すことは，わたし達にはいちじるしく困難であると述べており，トマスは，そのことを忘れてはならないと指摘しているのである[24]。

これらふたつのことを解答の〈主文〉として記した後，トマスは，今，取り上げている主張，すなわち，被造物のことごとくが，あるいは世界が永遠この方，在りつづけているとも考えられるとする主張を十通りも紹介し，ひとつひとつに反駁している。それらは，〈主文〉として記されている上記解答に変更ないし撤回をせまるものではないことを示そうとしているのである。ここでそうした主張のすべてを取り上げることはできないが，トマスがこの問にどのように向き合ったか，それをみてとることができると思われるもの二つに焦点を合わせ，要点をなぞっておきたい。なお，トマスの著作の多くにおいてと同様，この*Summa theologiae*も討論という体裁で論述がなされている。その際，立てられた問への，誰か先人によってすでに与えられている答，ここで眼を留めている例についていえば，「被造物のことごとくは，つまり世界と呼ばれているところのものは常に存在していたのであるか」という問への誰か先人の答，ただし，誤りを含んでおり，それゆえ，斥けられるべき答，もしくは主張は〈異論，*objectio*〉と，また，それへのトマスの返答ないし反駁は〈異論解答，*solutio*〉と呼ばれている。さらに，トマスの解答の根幹をなす記述は，すでに記したように，〈主文，*corpus articuli*もしくは*responsio principalis*〉と呼ばれている。

さて，二つの〈異論〉ないし主張のうちのひとつは，以下のように訴える。なんであれ，あるものがその存続に始まりをもつものであるとすれば，それには，存在しない以前があったということになる。また，その，存在しない以前においては，いずれ，存在するはずのものだったのでなければならない。すくなくともいずれ，存在することが可能なものだったのなければならない。そうでなければ，やがて，存在し始めるということは起こりえないわけだから。このことについては，この世界も同様である。そして，存在することを可能ならし

---

[23] Aquinas, Thomas, *Summa theologiae* 8, Gilby, T, ed. and trans., PP. 68~71，トマス・アクゥイナス『神学大全　第四冊』，日下昭夫訳，56頁。〔〕内，筆者。

[24] アリストテレス『トピカ』第一巻第十一章，村治訳，19~21頁，とくに20頁。Aquinas, Thomas, *Summa theologiae* 8, Gilby, T. ed. and trans., PP. 70~71，トマス・アクィナス『神学大全　第四冊』，日下昭夫訳，56~57頁。

めるものとは，そのものの質料にほかならない。したがって，世界が存在し始めたのであるなら，存在する以前にその質料が在ったはずである。

> 然るに，質料は形相なしには存在しえず，だが世界の質料が形相を伴えば，それはすでに世界なのである。世界はそれゆえ，その存在しない以前において〔すでに〕存在していたことになるであろう。これは，然し，不可能（*impossibile*）である。

つまり，この世界に始まりがあるということはありえず，それは永遠この方，在りつづけているに違いないという主張である[25]。念のために言い添えれば，この〈異論〉ないし主張が前提しているのはアリストテレスの理解，とくに形而上学や自然学において説かれているつぎのような理解である。すなわち，この世界に在るものないし実体はすべて，質料（*materia*）と形相（*forma*）という二つの原理から構成されている。たとえば青銅の円盤を例にいえば，それ自体としては未規定で，さまざまのものになりうる青銅という質料が，そのものの何であるか，どのようであるかを，あるいは何性（*quidditas*）を規定する形相に，この例であれば円盤たらしめる形相に伴われるとき，青銅の円盤という実体として現前することになるという理解である。青銅という可能態がそれを円盤たらしめる形相を受容するとき，青銅の円盤という現実態として現前することになるという理解だと言い改められてもよい。

これに対し，トマスはこの，*Summa theologiae* I-46-1の〈異論解答1〉において，次のように反駁している。

たしかに質料は種々の付帯性が付与されるとき，あるいは形相を受容するとき，さまざまのものとなって現前する。質料とは，つまり，受容性の原理，もしくは可能態（*potentia*）である。けれどもそれは，受動的な可能態（*potentiam passivam*）でしかなく，前もって所有していない何かが付与されたり，何かを受容したりしないかぎり，何らかのもの，たとえば世界になることはできない。神は，しかし，そうではない。神は，質料，ないしは受動的な可能態であれ何であれ，いかなるものも前提することなく，あるいはいかなるものにも依拠することなく，自ら意志してはたらき，果を生ぜしめる能動者である[26]。そして，先にみた解答の主文にもどっていえば，この世界は，そのような能動者である神が，それが在ることを意志する間，果として存続するのである。

なるほど，世界が未だ存在していない以前にあっても，世界の存在は可能であった。つい

---

[25] Aquinas, Thomas, *Summa theologiae* 8, Gilby, T. ed. and trans., PP. 64~65,『神学大全　第四冊』，日下昭夫訳，52頁。〔〕内，筆者。

[26] Aquinas, Thomas, *Summa theologiae* 8, Gilby, T. ed. and trans., PP. 48~49, 70~71,『神学大全　第四冊』，日下昭夫訳，38, 57頁。

先ほども述べたように，そうでなければ，やがて，存在し始めるということは起こりえないわけだから。それは，ただし，世界の質料が，世界の存在以前にすでに在ったということによって可能だったのではなく，今，みたように，神の能力によって可能であったのである。

したがって，この世界が永遠この方，在りつづけているとしても，あるいは，この世界には〈始まり〉というものはないとしても，そのことを世界の質料に訴えて示そうとする〈異論〉ないし主張は決定的で，それゆえ，覆しようのないものとはいえない，トマスはそう説いているのである。

ここで，ただし，急いでつけくわえておかねばならないことがある。それは，このように説くことで，トマスは，この世界が〈始まりのない世界〉であるということ，あるいはこの世界が永遠この方，在りつづけているなどということは，およそ，ありえないことだといっているのではないということである。トマスは，単に，世界の質料に訴えて立てられた論は決定的な論ではなく，それゆえ，覆しようのない論ともいえないと説いているだけである。そして，以下のように補っている。

たとえば，方形の丸屋根を持つ家があるという記述を構成する名辞はたがいに相容れず，それゆえ，これは，矛盾を含む記述だといわねばならない。つまり，方形の丸屋根を持つ家はありえず，この記述は虚なるものでしかない。けれども，造られたなにかが，たとえばこの世界が，造られたものでありながら，しかし，永遠この方，在りつづけているという記述を構成する名辞の間に，たがいに相容れないものはなく，それは，矛盾を含む記述ではない。したがって，そのようなものとして世界が在るということは，あるいは，造られたものである世界が，しかし，永遠この方，在りつづけているということは可能であり，すくなくとも論理的には否定できない。トマスはこのように補っているのである[27]。世界の質料に訴えて立てられた論は決定的で，それゆえ，覆しようのないものとはいえないとしても，だからといって，この世界には，「始まりというものがあったわけではなく，それは永遠この方，存在していた」とも考えられるとする〈異論〉ないし主張それ自体を，矛盾を含む馬鹿げたものとして片づけてしまうわけにはいかない，そう指摘しているといってもよい。

このことは，ただし，*Summa theologiae*においては，このI-46-1，〈異論解答1〉で，また前後する応答，すなわち，I-45-2，「神は何ものかを創造することができるか」の〈異論解答3〉，およびI-46-2，「世界に始まりがあったということは信仰箇条であるか」の〈異論解答1〉で，簡潔に触れられているだけである[28]。けれども他の論考，とくに*De aeternitate mundi*において

---

[27] Aquinas, Thomas, *Summa theologiae* 8, Gilby, T. ed. and trans., PP. 48~49, 70~71,『神学大全　第四冊』，日下昭夫訳，38, 57頁。

[28] Aquinas, Thomas, *Summa theologiae* 8, Gilby, T. ed. and trans., PP. 32~33, 80~81,『神学大全　第四冊』，日下昭夫訳，25~26, 65~66頁。

も取り上げられ，〈つぶやく者ども〉に説き聴かせるべく，ていねいに述べられている。立ち入った説明はこのエッセイに向き合うときにこころみたい。

ところで，トマスと同時代にパリ大学人文学部にあって哲学を講じた人びとのなかに，たとえそれが，神の啓示の告げるところと真っ向から対立する論を立てることになるとしても，理性の導くところにしたがうかぎり，わたし達は，この世界が〈始まりのない世界〉であるという可能性を否定することはできないと説いた人びとがいたことは，すでに言及したとおりである。事実，かれらのひとり，ブラバンのシゲルスは，トマスと同様に，*De aeternitate mundi* と題する小論を書き著し，そのなかで次のように述べている[29]。

シゲルスはまず，仮にもし，わたし達のこの世界，現実態として今，在るこの世界は永遠この方，在りつづけているのではなく，その存続に〈始まり〉があったとすると，この世界が世界として存続し始めるに先立って，世界が可能態にとどまるという状態があったにちがいないということになると説く。あるいは，世界の質料は在っても，それが，未だ形相を，つまり，質料をこの世界たらしめる，いわば，仕様書を受容していない状態にあったにちがいないというのである。

シゲルスは次いで，現実態と可能態のこのような関係は，これで完結するわけではないと指摘する。なるほど，世界が現実態として今，在るとすれば，それに先立ってそこから現実態へと向かう可能態としての世界，もしくは世界の質料が在ったはずである。しかし，可能態としての世界，ないしは世界の質料が在ったとしても，それがただちに今，在る世界，現実態としての世界になるわけではない。可能態としての世界，ないしは世界の質料にさらに先だって，その可能態に受容されることによって，現実態としての世界が引き出される形相，

---

[29] ファン・ステンベルゲン（1955），111~112頁によれば，シゲルスは1240年頃，今日のベルギー，オランダ両国にまたがるブラバン公国に生まれたとされる。1255年頃から60年頃にかけてパリ大学人文学部に学び，ついで，哲学を講じるようになったが，やがて，キリスト教の信仰を危うくしかねないと教会が憂慮する異教の哲学への執着をあらわにするようになり，その結果，二度にわたって説くところが異端であると断罪されたことはすでに言及したとおりである。この断罪をうけてシゲルスはパリの異端審問所法廷に召喚されたが，それには応じず，教皇庁に逃れたという。そして，教皇の法廷に留め置かれていたが，そこで非業の死を遂げる。秘書のような役割の人物に殺害されたのである。1281年から84年にかけてのことだといわれる。

哲学者としてシゲルスがどれほどすぐれていたか，それを判断することは筆者のなしうるところではない。ただ，参考までにいえば，ダンテは『神曲』天国篇･第十歌において十二名の賢人の名を挙げ，そのなかにトマス，アルベルトゥス･マグヌス等とならんでシゲルスをくわえている。ダンテが，さて，どれほどシゲルスの著作に通じていたか，それは，わからない。『神曲』，平川訳，479頁。

なお，Vollert（1964）の編者のひとり，ケンズィエルスキ（Kesndzierski, L. H.）によれば，シゲルスが *De aeternitate mundi* を書き著したのは1270年から1272年にかけてのことだとみられるという（Vollert（1964），P.27）。つまり，トマスのエッセイより後に書かれたということも考えられるのである。仮にそうだとすれば，トマスは，シゲルスの同名の小論に眼を通す機会をもてないまま，自身のエッセイを執筆したということになる。けれども，そうであったとしても，トマスが，シゲルスの説いているところをまったく，知らないまま，執筆するほかなかったということにはならない。講義や討論の場に同席することもできたであろうから，知る機会に不足はなかったとみてよいであろう。

あるいは世界の仕様書がなければならなかったはずである。そしてこのように，可能態としての世界，ないしは世界の質料が形相にともなわれて在るということは，すでに，現実態としての世界が在ったということにほかならない。その現実態としての世界が，ただし，今，在る世界と寸分たがわない世界であるかどうか，それは分からない。いずれにせよ，しかし，可能態としての世界に先立って，現実態としての世界が，何らかのあり様で在ったにちがいないのである。そして，現実態としての世界が何らかのあり様で在ったということは，さらに先立って可能態としての世界，ないし世界の質料が，それもまた，何らかのあり様で在ったはずだということになる。現実態と可能態のこうした関係は，このようにかぎりなく反復し，それゆえ，果てしなくさかのぼることができるのである。

つまり，現実態としてのこの世界の〈始まり〉は果てしない以前にまでさかのぼることができるのであり，この世界に，非存在のあとの存続という意味での〈始まり〉があったとする理解にわたし達はたどりつくことができない。すくなくとも，理性の導くところに従うかぎり，たどりつくことはできない。むしろ，世界に〈始まり〉はなく，永遠この方，在りつづけているとしても，なんら，不都合はなく，ありうることだと認めざるをえない，そう，シゲルスは述べているのである[30]。

このようなシゲルスの立論は，さて，トマスの眼には，どのように映っただろうか。おそらく，なにほどかの意味があるとしても，どこまでも，思考実験をなすための試論，あるいは学生向けのドリル以上のものではないとみなされたことであろう。というのも，先にも述べたように，可能態，もしくは世界の質料であれ何であれ，いかなるものの存在も前提することなく，あるいは何ものにも依拠することなくすべてを造り出すことのできる能作者，ないしは能動者である神，その神が在らしめようと意志する間，果として存続するもの，それがこの世界であるということ，それが，トマスにとって，けっしてゆるがせにすることのできない世界の原理，世界の根源的な原理であったわけだから。

三　自存する存在，依存的存在

さて，「被造物のことごとくが常に存在していたのであるか」(*Summa theologiae* I-46-1) という問に答えるにあたってトマスが取り上げ，そして反駁しようとしている〈異論〉ないし主張，この世界には始まりというものがあったわけではなく，むしろ，永遠この方，存在していたとも考えられるとするいくつもの〈異論〉ないし主張のうち，ここで眼を留めたいもうひとつは，以下のように訴える。

---

[30] シゲルスの所説についての以上の説明は，Vollert (1964), PP. 75~97に収録されているシゲルスの*De aeternitate mundi*の英語版，とくに，PP. 91~95によっている。

なんであれこの世界に在るものはさまざまにその居場所を変え，また，生成，増大，減少，消滅をくりかえす。つまり，さまざまに運動 …… すでに言及したように，場所的な移動だけでなく生成，増大，減少，消滅等の変化も一括して運動と呼ばれた …… しているのである。それら被造物の運動は，ただし，何かしら別の運動が先行していて，それに動かされ，あるいはうながされるのでなければは生起しない。身近にみられる運動，たとえば，撞球の的玉が動き出し，クッションに当たってはねかえるという運動ないし場所的な移動や，日向に置かれていて温まった水が，やがて冷めてしまうといった変化について考えてみれば，このことは容易に納得されよう。的玉や容器のなかの水それ自体には，動き出し，ついで，はねかえるという場所の移動や温まり，やがて冷めてしまうという変化を生ぜしめる力ないし能動性は具わっていないからである。

> …… だから，新たに始まるいかなる運動よりも前に，それとは別の運動が存在していたのでなくてはならない

といってよい[31]。かりに何かが動き出した，あるいは変化し始めた，それも，他のいかなるものの場所的移動や変化に動かされ，うながされたわけでもないのに動き出し，変化し始めたとみえることがあるとしても，それは事実ではない。必ずや何らかのものの，それに先行する場所的移動や変化があり，それに動かされ，うながされて動き出し，変化し始めたはずである。つまり，的玉の場所の移動に，また容器のなかの水の変化に，さらにいえばすべての被造物の場所の移動や変化に，先行する移動や変化が何もないにもかかわらず生起したという意味での〈始まり〉があったということはありえない。換言すれば，今，視認されている被造物のあらゆる運動の起源は，果てしない以前にまで溯られうるのである。そうであるなら，それら被造物からなる世界にも，非存在の後の存続，つまり〈始まり〉というものがあったとは考えられず，世界は，永遠この方，在りつづけているにちがいないというのである。

これに対してトマスは以下のように反駁する[32]。神は，なんらかのものを前提したうえで他の何かのものをもたらす能動者，もしくは果を生ぜしめる能動者，すなわち特殊的な能動者（*agente particulari*）ではない。神は，そうではなく，なにものも前提することなく，あるいはなにものも介することなくすべてを産み出す能動者，普遍的な能動者（*agente universali*）であり，すでに述べたように，その意志にもとづいてなにかを造り出すにあたって，そのも

---

[31] Aquinas, Thomas, *Summa theologiae* 8, Gilby, T. ed. and trans., PP. 66~67,『神学大全　第四冊』，日下昭夫訳，53~54頁。

[32] Aquinas, Thomas, *Summa theologiae* 8, Gilby, T. ed. and trans., PP. 72~75,『神学大全　第四冊』，日下昭夫訳，58~60頁。

のの質料が，あるいは受動的な可能態が前もって存在していることを要しない。それら被造物に運動を，すなわち場所的な移動や生成，増大，減少，消滅等の変化を生ぜしめるにあたっても，同様に，別の何かの運動が先行してあることを要しない。被造物の運動について，「新たに始まるいかなる運動よりも前に，それとは別の運動が存在していたのでなくてはならない」とする言明は，それゆえ，普遍的な能動者である神のなしうるところについては妥当せず，したがってそのような言明のうえに立てられた論は，決定的で，それゆえ，覆しようのないものとはいえない。

トマスは，このように指摘してこの〈異論〉ないし主張を斥けた後，次のような言葉を添えている[33]。

…… 事物のみならず時間をも産出するところの普遍的な能動者〔である神〕にあっては，…… 欲するだけの時間を，自らの能力を証示するに適するところに従って，自らの果に〔，たとえばこの世界という果に〕与えたのであると考えるべきなのである。まことに，「世界は常に存在していた」とする場合よりも，「世界は常に存在していたのではない」とする場合の方が，世界は，「創造者たる神」の能力の認識にまで，より明白な仕方で我々を導く ……。

トマスは，なお，*Summa contra gentiles* にもおおよそ，内容の重なる言葉を記している。下記のような言葉である[34]。

もろもろのものを造り出すにあたって神が意図したのは，〔それら〕神のもたらす果にその善性をくっきりとあらわすことにある。神の力と善性は，ただし，神自身を別にしてなにものも永遠この方，在りつづけているのではないという事実によってよくあらわされる。 ……〔この事実は，〕もろもろのものがその存在を〔すっかり，〕神に負っていること，そして，〔それらもろもろのものという〕果をもたらすに際して，神は，いかなる必然性にも支配されてはいないということを，さらには，神の力にはかぎりがないということをはっきりと示しているのである。神の善性をくまなくあらわすには，それゆえ，もろもろのものに神が存続の〈始まり〉を与えることがもっともよく適合しているのである。〔永遠この方，在らしめるのではなく。〕

これらの言葉が，この世界には〈始まり〉というものはなく，永遠この方，在りつづけているとも考えられるとする主張を斥けるに十分な反駁，論理的にスキのない反駁になってい

---

[33] Aquinas, Thomas, *Summa theologiae* 8, Gilby, T. ed. and trans., PP. 74~75,『神学大全　第四冊』，日下昭夫訳，59~60頁。〔〕内，筆者。

[34] II-38，Vollert（1964），P. 44, Anderson（1975），PP. 114~115. なお，引用はVollert（1964）によっている。

るとは言いがたい。実際, トマスが, そのためにこのような言葉を書き記したとは思われない。けれどもこれらは，神の善性へのトマスの深い思い入れを感じさせる言葉である。それらは，また，示唆に富み，ウイッペルの表現を借りていえば，もろもろの被造物が，この主張ないし〈異論〉とは逆に〈始まり〉をもつものとして造り出されたのはなにゆえか，わたし達がそのわけについて思いをめぐらそうとするとき，格好の手引き（a more effective procedure）となる言葉だといってよかろうか[35]。

とりわけ，トマスの言葉は，わたし達被造物は自存する（*subsistere*）存在ではなく，まさしく依存的な（*contingere*）存在だということをしっかりと気づかせてくれる[36]。いかなる必然性にも支配されることのない神が，自ら意志して造り，また，自身の善性がくまなくあらわされるようにその存在に〈始まり〉とそのことに適するだけの存続の時間を与えて世に在らしめたのがわたし達被造物である。端的にいえば，トマスは，わたし達はもとより，世に在る被造物のことごとくが，その存在をすっかり（*totaliter*）神に依存し，神に負っていると承知するよう説いているのである。そして，それが，世界の創造（*creatio*）に他ならない。世界の創造とはどういうことかと訊ねられるとき，トマスは，そのように答えて止まなかった[37]。

ところで，世界の〈始まり〉をめぐっては，遠い以前から発せられてきた問，おそらくは紀元前五世紀のエレアのひと，パルメニデスにまでさかのぼることのできる問がある。世界に〈始まり〉があったとして，しかし，その〈始まり〉は，“why not sooner?”, “why later rather than earlier?”と質す問である[38]。

なるほど，時間が世界から独立して，あるいは世界に先行して経過しており，その軸上のある時点で世界が始まったとするなら，“why not sooner?”，“why later rather than earlier?”と問われることになろう。世界が金曜日に存在し始めたとすれば，なぜその〈始まり〉は金曜日でなければならなかったのか，もっと早く，たとえば木曜日でなかったのはなぜかと問われるちがいない。まして，神は，いかなるものにも依拠することなく世界を造りえたのであるからには, その存続の〈始まり〉をいつになりと決めることができたはずである。それゆえ，

---

[35] Wippel（1981）, P. 25.

[36] これは，トマスに寄せた文章のなかで，ヴォラートも強調している点である。Vollert（1964）, P. 15.

[37] Aquinas, Thomas, *Summa theologiae* 10, Wallace, W. A. ed. and trans., PP. 16~17,『神学大全　第五冊』，山本清志訳，13頁，Aquinas, Thomas, *Summa theologiae* 8, Gilby, A. ed. and trans., PP. 26~29,『神学大全　第四冊』，日下昭夫訳，20~21頁。

[38] パルメニデスの発した問のどのようであったかは，詩の形でつづられた文章のいくつかの断片を通してしかうかがい知ることはできない。ただしそれらにはTarán（1965）, Gallop（1984）など，いく人もの研究者によって編まれた英訳があり，三浦（2011）の邦訳もある。また，Owen（1960）, Sorabji（1983），とくにChapter 15，Mourelatos（2008）, PP. 98~100には示唆に富む註解が含まれている。なおエレアは，紀元前六世紀半ば頃に南イタリアに建設されたギリシアの植民都市のひとつである。

ひとが，“why not sooner?”，“why later rather than earlier?”と問うのはごく，自然なことであるにちがいない。

このような問いかけに対してトマスは，*Summa contra gentiles*[39]，*De potentia Dei*[40]などいくつもの論考のなかで，つぎのように応じている。すなわち，これは，それを立てる足場のない問，立てることのできない問であるというほかない。というのも，時間も世界の〈始まり〉に世界とともに造られたのであり，したがって，世界に先行して，あるいは世界とは独立に経過する時間軸というものはないからと。

このように応じたうえでトマスは，問われるべきは，神はなぜ，もっと早くに，たとえば，金曜日にではなく木曜日に，世界を造らなかったのかという問ではなく，むしろ，神は，永遠この方，在りつづけるという仕方で被造物を造らなかったのはなぜか，あるいは，そもそも被造物の存続に〈始まり〉を与えたのはなぜかという問であると，切り返している。そして，自身の理解するところをすこし前に引用した言葉に，すなわち，神が，もろもろのものを永遠この方，世に在らしめるのではなく，存続に〈始まり〉を与えたのは，そうすることがその善性を被造世界にくまなくあらわすのにもっともよく適合しているからにほかならないという言葉に託して言い表そうとしたのである。

四　運動という仕方ではたらく能動者，さにあらざる能動者

さて，*Summa thelogiae* I-46-1で，また，*Summa contra gentiles*や*De potentia Dei*の一節でこの世界には始まりというものがあったわけではなく，それは永遠この方，在りつづけていたとも考えられるとする〈異論〉ないし主張に向きあい，以上のように説いたトマスは，前々節で言及したとおり，*De aeternitate mundi*においても同じ主張に向き合い，自身のたどりついた理解を一層，ていねいに書き記している。以下，本節ではその要点をなぞっておきたい。

トマスは，まず，その冒頭で次のように述べ，問われているのはなにかを，まぎらわしさの入り込む余地のないよう，はっきりさせている。

すなわち，この〈異論〉ないし主張に，もしくは先の申し立てに，つまり，この世界は，〈始まりのない世界〉ではありえないと論証することはできないという申し立てに，わたし達は同意するほかないか否か，それを問うということは，なんらかの能動者によって造られたあるものが，造られたものでありながら，しかし，永遠この方，在りつづけているという記述は，矛盾を含む記述であるといわざるをないかどうか，それを問うということにほかならない。あるいは，あるものが何らかの能動者によって造られたものであると述べることと，そのも

[39] II-35, Vollert (1964), PP. 36~37, Anderson (1975), P. 104.
[40] q-3, a-17, Vollert (1964), PP. 53.

のが, しかし, 永遠この方, 在りつづけていると述べることがたがいに相容れない（*repugnantia*）といわざるをえないかどうか，それを問うことにほかならないと説いている。そしてトマスは以下のようにつづけている[41]。

…… *si autem non est repugnantia intellectuum, non solum non est falsum sed etiam〔non est〕impossibile: aliter esset erroneum, si aliter dicatur.*

もし，相容れないといわざるをえないとすれば，なんであれ造られたものが，永遠この方，在りつづけているという記述は矛盾を含んでおり，それは，ありえないということになる。けれども，そうではないとすれば，造られたものが，しかし，永遠この方，在りつづけていると述べることは嘘偽り（*falsum*）をいうことではないし，ありえない（*impossiblile*）ことでもないということになる。この世界も造られたものであってみれば, 同様にいうことができる。

このようにトマスは述べ，このことを否定するのは，むしろ，誤り（*erroneum*）であると強調しているのである[42]。

次いでトマスは，たがいに相容れないといわざるをえないかどうか，それは，もろもろのものを，あるいは果を造り出す能動者が働いてものが造り出され，果がもたらされるとき，その能動者が，何らかの運動という仕方によって働くのかどうか，それにかかっていると指摘する。というのも，運動という仕方によって働くのであれば，もの，ないし果の存続には〈始まり〉があったはずであるということになる。すこし後にみるトマス自身の言葉でいえば，それは, そのような能動者の果をもたらす働きは, 時間的に必ず, その果に先立つからである。あるいは，場所的な移動であれ，生成，増大，減少，消滅といった変化であれ，およそすべての運動の始まりとその終極である果の現前の間には，どれだけかの時間の経過がともなうからである。つまり，もろもろのもの，もしくは果は，能動者がものを造り出すべく，あるいは果をもたらすべく働いてから，どれだけか時間が経過した後，はじめて，現前することになる。それらが現前するまでには，長短はどうあれ，どれだけかの未だ存在しない時間の経過があったことになる，そういってもよい。いずれにせよ，もの，ないし果の存続には〈始まり〉があったはずであり，それらが，永遠この方，在りつづけているということはありえ

---

[41] *De aeternitate mundi, Sancti Thomae de Aquino, Opera Omnia XLIII*, Iussu Leonis XIII P.M. edita, Roma: 1976, P. 86, lines 68~71. なお，レオ版（Iussu Leonis XIII）の脚註にも記されているように，その編集者達は上記のように〔〕内にnon estと書きくわえるのが適切だとみている。文脈からすればもっともだとみられるので，そのように補った。ウィッペルも同じ見方をしている。Wippel（1981）, P. 33.

[42] トマスの手になる*De aeternitate mundi*の上記一節は，Vollert（9164）では，次のような英文に改められている（P. 20）。However, if there is no contradiction in the concepts, not only is it not false, but it is even possible; to maintain anything else would be erroneous.

ないということになる。あるものが造られたものであると述べることと，そのものが，しかし，永遠この方，在りつづけていると述べることは，それゆえ，たがいに相容れないといわざるをえないのである。

しかし，神がその能動者であるなら，事態はまったく違ってくる。トマスは，このことを見過ごしてはならないと警告し，そのわけを，*De aeternitate mundi*においても触れているが，*Summa theologiae* I-9-1「神はあらゆる意味において不変なるものであるか」という問への解答（〈異論解答3〉）のなかで，力強く，しかも，わかりやすい言葉で説明している。以下のような説明である[43]。

> …… 動くものはすべて，その運動によって何らかのものを獲得し，以前には到達していなかったところのものに到達する。然るに神は無限であり，自らのうちに存在全体の完全性のあらゆる充実を含むものなるがゆえに，神が何らかのものを獲得するということはありえないし，以前に到達していなかった何ものかにまで及ぶということもありえない。だから，如何なる意味においても運動ということは神には適合しない ……。

それゆえ，神が能動者としてはたらき，何らかのものが，もしくは果が造り出され，世にあらしめられる場合，それは，どれだけかの時間の経過がともなう運動という仕方によってあらしめられるのではない。むしろ，瞬時に，つまり，神がそのことを意志すると同時にあらしめられる[44]。このような神のはたらき，すなわち

> …… 創造とは運動なきはたらき（…… *creatio sit sine motu*）

なのである[45]。したがって，それらが現前するまでには，どれだけかの未だ存在しない時間が経過したはずであり，もの，ないし果の存続には〈始まり〉があったということになるという論はすべての能動者に妥当するわけではない。すくなくとも，神については妥当しない[46]。

つまり，あるもの，もしくは果が，たとえばこの世界が，神によって造り出されたと述べることと，それが，しかし，〈始まり〉をもたず，永遠この方，在りつづけていると述べることはたがいに相容れないわけではない。したがって，この世界は，造り出されたものであり

---

[43] Aquinas, Thomas, *Summa theologiae* 2, McDermott, T. ed. and trans., PP. 126~129,『神学大全　第一冊』，高田三郎訳，161頁。
[44] *De aeternitate mundi*, Iussu Leonis XIII P.M. edita, P. 87, lines 88~95, Vollert (1964), P. 21.
[45] Aquinas, Thomas, *Summa theologiae* 8, Gilby, A. ed. and trans., PP. 141~144,『神学大全　第四冊』，日下昭夫訳，25頁。
[46] *De aeternitate mundi*, Iussu Leonis XIII P.M. edita, P. 86, lines 88~95, Vollert (1964), P. 22.

ながら，しかし，〈始まり〉をもっているわけではなく，むしろ永遠この方，在りつづけているとする記述には，矛盾は含まれておらず，それゆえ，世界がそのようであることは，すくなくとも論理的には可能であり，それを否定することはできないといわねばならない。

こうしてトマスは，この世界は，〈始まりのない世界〉ではありえないと論証することはできないという申し立てにわたし達は同意するほかないと説くのである。この世界には始まりというものがあったわけではなく，それは永遠この方，存在していたとも考えられるとするいくつもの〈異論〉ないし主張が，たとえば，世界の質料という受動的可能態に訴える例がそうであるように，決定的で，それゆえ覆しようのないものではないとしても，そうした〈異論〉ないし主張それ自体を，理にもとる馬鹿げたものとして片づけてしまうわけにはいかないと説いているといってもよい。

なおWippelは，この*De aeternitate mundi*においてトマスが*Summa theologiae*をはじめとするそれ以前の論考より一歩，踏み込んだ見方を示しているとみている。すなわちトマスは，この世界は〈始まりのない世界〉でありえないと論証することはできないという申し立てを，わたし達は斥けることはできないと述べるだけでなく，世界が〈始まりのない世界〉であることはまさしくありうることだと述べ，この，ありうるということを否定するのは，むしろ誤りであると言い切っているとウィッペルはみているのである[47]。また，Bradyにしたがっていえば，トマスに*De aeternitate mundi*を書き著し，そこに一歩，踏み込んだ見方を示すよう促したのは，〈つぶやく者ども〉に，すなわちこの世界に〈始まり〉のあることは，神の啓示であるのみならず，論証されうる真理でもあるとする自説に固執しつづけたアウグスティヌス派の神学者達，とくに，John Peckhamに，自らの理解をしっかりと説き聴かせねばならないという思いであったという[48]。

ウィッペルの，また，ブラディのこのような見方の他にも，トマスの説いたところについては，さまざまな受けとめ方があるかもしれない。いずれにせよ，しかし，見落とされてはならないことがふたつある。

ひとつは，何らかのもの，あるいは果をもたらそうとするときの働く仕方についてトマスが，能動者の間に立てた区別，すなわち，運動という仕方ではたらく能動者，さにあらざる能動者という区別は，神の創造の業をめぐるトマスの理解のなかに，しっかりととらえておかねばならない意味をもっているということである。それは，運動という仕方ではたらく能動者は，なにをもたらすにせよ，運動がそこでなされる場に由来する制約下におかれるが，さにあら

---

[47] ウィッペル自身の言葉でいえば，…… now he …… つまり，トマスは …… is saying that it is not only not false to defend the possibility of eternal creation, but that such is indeed possible and, moreover, that to deny this possibility is *erroneous* とウィッペルみているのである。Wippel（1981）, P. 32.

[48] Brady（1974）, P. xx, Wippel（1981）, P. 37.

ざる能動者は，そうした制約からまったき，自由だということである。

たとえば，地上においては，あるいは月面下においては，重いものはそれを妨げるなにかが介在しないかぎり，地地の中心に向かって下降しようとするし，軽いものはその逆である。そうした重いものや軽いものについて運動という仕方で働き，何らかの果をもたらそうとする能動者の働きは，したがって，それらのことによって何ほどか制約されることになる。

他方，さにあらざる能動者は，そうした制約からまったき，自由である。さにあらざる能動者である神は，それゆえ，なにものにも制約されることなく，自らの善性をそこにあらわすに適するように，世界を造り，存続させうるのである。運動という仕方によることなく，果をもたらしうる能動者であってこそ，被造物の世界に自らの善性を分有させるという業，すなわち世界の創造は，能動者の意志するようになされうるというのが，トマスの理解だといってよかろうか。

もうひとつ，見落とされてならないのは，トマスの説いたところ，わけても*De aeternitate mundi*において説いたところは，教会がよしとする教えにそぐわないということである。なにしろ，神の啓示の告げるところであると教会がみなす教えに，つまり，この世界には〈始まり〉があるとする教えにもとるといわれても仕方のない理解が説かれているのだから。

けれども，錯誤に陥ることなくしっかりと論理を踏んでいこうとするかぎり，そのように説かざるをえない。以前にも紹介した言葉，そして後にも触れる言葉を先取りしていえば，論理に瑕疵のある論を，とくに，不信者たちから嘲りを受け，それゆえ，かれらをキリスト教へと導く途が断ち切られてしまいかねない，そのような瑕疵のある論をもてあそぶことがあってはならない。そして，アウグスティヌス派の神学者達の論にはそのおそれがある。それゆえ，かれらに，そのことに気づかせねばならない，たとえかれらのなかにパリ大学神学部の同僚として，それも，托鉢修道会出身の同僚として困難な時期を共にした学僧がいるにせよ，しっかりと説き聴かせ，誤りに気づかせねばならない，そうトマスは思い定めていたとみられるのである[49]。己にあたられた使命であると承知していたといってもよかろうか。

五　世界に始まりがあったということは論証の可能な結論であるか

ところで，トマス自身は，この世界に〈始まり〉のあることは神の啓示の告げるところであり，それゆえ，偽りであることなどありえないと受けとめていたのだろうか。あるいは，真であ

[49] 以前にも註記したように（脚註15），教区聖職者出身の教授達，とくにサンタムールのギョームに先導された教授達は，托鉢修道会を激しく論難しつづけた。その結果，パリ大学におけるトマスの教授任用がしばし，妨げられたとされる。論難の標的となったのは，ただし，トマスひとりではない。トマスより以前に教授に任用される条件をみたしていたフランシスコ会のボナヴェントゥーラも，同様の論難にさらされ，教授への任用が何年か遅延させられたのだという。なお，このことの顛末については，稲垣(1992)，PP. 144~153に詳しい説明がある。筆者も，西藤(2012)，24~25頁で簡潔な説明をこころみた。

ると確信していたのだろうか。こうしたことについては，あれこれ憶測を述べるたり，わざとらしく疑問を投げかけたりすることは控えねばならない。余人にはわからないことである。いずれにせよ，しかし，論証の可能な結論（*conclusio demonstrabilis*），もしくは論証されうる真理でもあるかと問われたときの，トマスの答は否であった。そのことは，これまでにみてきた論考やエッセイのなかに，すなわち，*Summa thelogiae* I-46-1において，また，*De aeternitate mundi*で論じられていることのなかに，すでに，含意されている。この世界には〈始まり〉というものがあったわけではなく，永遠この方，在りつづけているとも考えられるということを説こうとしてこれまでに提起されてきた〈異論〉ないし主張はおおかた，決定的で，それゆえ覆しようのないものではないとしても，だからといってそれらを理にもとる馬鹿げたことが述べられているだけのものとして片づけてしまうわけにいかないということが示されたのだから。あるいは，この世界は，〈始まりのない世界〉ではありえないと論証することはできないという申し立てに，わたし達は同意するほかないということが示されたのだから。

けれどもトマスは，いくつもの論考において，たとえば*Summa thelogiae* I-46-2において，また，*De aeternitate mundi*において，世界に〈始まり〉のあることは論証されうる結論，もしくは真理でもあるかという問に改めて向き合い，

> 世界が常に存在していたものならぬことは，ただ信仰によって（*sola fide*）把持されるのみであり，論証的に証明されることのできないことがら

であると承知しなければならないということを，くりかえし説いている[50]。そして，トマスが自らのこうした理解をどのように説いたか，それを見届けることが，この小論の目指すところである。そのためにまず，トマスの理解と真っ向から対立する論，世界に〈始まり〉があったことは，神の啓示の告げるところであるだけではなく，論証可能な真理でもあるとするアウグスティヌス派の神学者達の論をふりかえっておきたい。とりわけ，ボナヴェントゥーラの説いたところをふりかえっておきたい。アウグスティヌス派の神学者達のなかからとくに，ボナヴェントゥーラの所説に眼を留めるのは，この学僧が，かれらを唱導する存在であったとみられるからである[51]。

---

[50] Aquinas, Thomas, *Summa theologiae* 8, Gilby, A. ed. and trans., PP. 78~79,『神学大全　第四冊』, 日下昭夫訳, 64頁，傍点，筆者。

[51] ボナヴェントゥーラが生を享けたのは1221年のこと，したがってトマスより四年ほど年長であったということになる。そして，1238年頃，フランチェスコ会の一員になったとされる。やがて，トマスと同様にパリ大学神学部において神学を講じ討論を主宰するようになるが，しかし，比較的早く，教授職を辞し，生涯の多くの時間をむしろ，自身の修道会を束ねることに捧げた。他界したのは1274年6月。つまり，トマスに遅れること三月，後を追うように世を去ったのである。やはり，リヨンの公会議に出席していたおりのことだという。

さて，ボナヴェントゥーラは，トマスもそうしたように，世界には〈始まり〉があったわけではなく，永遠この方，在りつづけているとも考えられるとするいくつもの主張に反駁した後，自身のたどりついたところを書き著している。すなわち，この世界には〈始まり〉があること，それは，神の啓示の告げるところであるのみならず，わたし達が，真であると論証しうるところでもあるということを，いくつかの論考に書き著しているのである。以下のふたつは，それぞれ，そうした論考の一節である[52]。

〔なにかが，他のなにかによって〕いかなるものにも依拠することなく造り出されるということは，〔そのなにかは，〕非存在の後に存在するようになるということにほかならない。

しかるに，このことはまさしく，この世界に妥当する。というのも，

その存在を他のなにかにすっかり，負っているものはすべて，そのなにかによって何ものにも依拠することなく造られたのである。ところで，この世界はその存在をすっかり，神に負っている。それゆえ，世界は〔神によって〕何ものものにも依拠することなく造られたのである

から[53]。つまり，神によって何ものにも依拠することなく造られたこの世界は，それゆえ，非存在の後に存在するようになった，あるいは，その存続には〈始まり〉があったということになる，そうボナヴェントゥーラは説いているのである。

ボナヴェントゥーラのこのような所説は，さて，トマスにはどのように映っただろうか。

まず，ふたつ目の文章の述べるところについては，トマスも異を唱えることはないであろう。あえていえば，ボナヴェントゥーラの文章には誤解を招きかねないところがあると懸念するかもしれない。というのも，なにか（a）が他のなにか（b）にその存在をすっかり，負っているなら，そのなにか（a）は，他のなにか（b）によって何ものにも依拠することなく造られたということができる，そう説かれていると受けとめられかねない。あるいは，（a）が（b）にその存在をすっかり，負っているということが，（a）が（b）によって何ものにも依拠することなく造られたということができるための条件である，そう述べられていると受けとめら

---

[52] そのひとつである下記の文章は，『ブレヴィロクイエム・神学要綱』の一節（*Breviloquiem II, 1, 1-3*）である。なお，引用は，Vollert（1964），P. 117に掲載されている英訳文，And …… production out of nothing posits being（*esse*）after non being（*non esse*）…….によっている。ただし，〔〕内，筆者。

[53] ふたつ目である上記の文章は，ペトルス・ロンバルドゥスの『命題論集』を講じるためにボナヴェントゥーレが用意した註解の一節（*In II Sent. d.1, p.1, a.1, q.2*）である。また，引用は，Vollert（1964），P. 109に掲載されている英訳文，…… everything whose having of being is totally from another is produced by the latter from nothing; but the world has its being totally from God; therefore, the world is〔produced by God〕out of nothing.によっている。ただし，〔〕内，筆者。

れかねない。そのような受けとめ方は，しかし，トマスからすれば，訂正を求めたいところであるにちがいいない。というのも，（a）がその存在をすっかり（b）に負っているということが，すなわち，（a）が（b）によって何ものにも依拠することなく造られたということにほかならない。そのように解されねばならないというのが，トマスの理解であったみられるからである。第三節でも触れたように，事実，トマスは，この世界は，その存在をすっかり，神に負っているということが，世界が何ものにも依拠することなく神によって造られたということ，すなわち，神によって世界が創造されたということに他ならないと説いて止まなかった[54]。

ともあれ，世界はその存在をすっかり神に負っているということについては，言い換えれば世界は，神によって何ものにも依拠することなく造られたということについては，トマスもいささかも異を唱え，あるいは疑念を投げかけることはなかったはずである。けれども，最初の文章に述べられていることについては，つまり，なにか（a）が，他のなにか（b）によって何ものにも依拠することなく造り出されたとすれば，（a）は非存在の後に存在を，したがってその存続に〈始まり〉をもつに違いないという文章については，誤りを含んでおり，斥けられるほかないとトマスは言い切るにちがいない。

なるほど，もし，この最初の文章に述べられていることに誤りはなく，推論の前提として置くことができるとすれば，この世界は〈始まり〉をもつ世界であることが論証的に示されるといえるかもしれない。神によって何ものにも依拠することなく造られた世界，それが，この世界だから。しかし，トマスにしたがっていえば，この文章は誤りを含んでいる。そのことが*De aeternitate mundi*に示されていることは，前節でみたとおりである。要点をくりかえしていえば，何ものにも依拠することなくこの世界を造り出した神のはたらき，つまり創造とは，〈運動なきはたらき〉であり，はたらきの果であるこの世界は，神がそれを意志したと同時に現前する。ちょうどランプが点灯されると，同時にそのランプによってまわりが明るく照らし出されるように。つまり，運動という仕方によって働く能動因について妥当する論，何であれ，造り出される果が現前するまでには，長短はさまざまでありうるにせ，どれだけかの未だ現前しない時間が，すなわち，運動の始点から働きの果が現前する終極までの時間が経過していたはずであり，したがって，果の存続には〈始まり〉があったということになるという論は，神の創造というはたらきには妥当しない。このことをトマス自身は，

> …… 運動（*motus*）という仕方によって働く〔能動因（*causa activa*），ないしは〕作動因（*causa efficiens*）は，時間的に必ずその果に先立つ。果は働きの終極においてしかありえず，〔作動因，もしくは〕能動者は，

[54] 脚註37を参照されたい。

しかし，すべて働きの始源たるのでなくてはならないからである。然るに，もし，その働きが瞬間的な（*instantanea*）ものであって継次的な（*successiva*）ものでないならば，「はたらくもの〔ないし能動者〕」が，持続において，その果よりも先なるものたるべき必然性は存しないこと，「照明（*illuminatio*）」の場合において明らかなごとくである。こうした意味でひとびとは，「神が世界の能動因〔，もしくは作動因〕ではあっても，それが持続において世界よりも先なるものであるということが必然的にそこから帰結してくるわけではない」と論ずるのである。事実，神がよってもって世界を産出した「創造」ということは，……〔運動なきはたらきであって〕継次的な変化（*mutatio successiva*）ではない

と述べ，この世界の存続には〈始まり〉があったことは，神の啓示であるのみならず，わたし達が真であると確証することのできるところでもあるとする主張を，つまり，ボナヴェントゥーラの説いたところを斥けている[55]。

ところで，この小論を書き上げるにあたって筆者が多くを負っている書物，*ST. Thomas Aquinas, Siger of Brabant and ST. Bonaventure: On the eternity of the world*（*De aeternitate mundi*）の編者のひとりであるサイリル・ヴォラート（Cyril Vollert）は，トマスに寄せた序文のなかでつぎのように述べている[56]。

何ものにも依拠することのない存在，すなわち神によってすべてが造られ，そして今，世に在るように保持されているということ，つまり，すべての被造物の神への根源的な依存，それが世界の創造である。そのような世界のあり様とその存続に〈始まり〉があったか否かの間には，いかなる論理的なつながりもない。それがトマスの説くところの根底をなす理解である。それゆえ，ボナヴェントゥーラの推論，なにかが，たとえば世界が，他のなにかによって，たとえば神によって何ものにも依拠することなく造り出されたとすれば，そのなにかは，あるいは世界は，非存在の後に存在を，したがって存続に〈始まり〉をもつにちがいないという推論はまったく，成り立ちえない，そう，ヴォラートは述べているのである。そのとおりであろう。トマスは，事実，そのことを，運動という仕方で働く能動者と世界の造り手としての神の間の差異 …… それは，前節の末尾でも触れたように，きわめて重い意味をもつ差異である …… から説き起こし，ボナヴェントゥーラをはじめとするアウグスティヌス派の神学者達に，あるいは〈つぶやく者ども〉に説き聴かせようとしたのである。

なお，世界に始まりがあったということは，論証可能な結論でもあるということを示そうとしてボナヴェントゥーラが立てた論のなかには，つぎのように訴えるものもある。

もしこの世界が永遠この方，在りつづけているとすれば，無限数のひとがこの世に生を享

---

[55] Aquinas, Thomas, *Summa theologiae* 8, Gilby, A. ed. and trans., PP. 80~81,『神学大全　第四冊』, 日下昭夫訳, 66頁。〔〕内，筆者。
[56] Vollert（1964）, PP. 4~7.

けていたはずである。然るに，ひとの肉体は滅んでも，魂は不滅であり，それゆえ，無限数のひとの魂（*infinitae animae humanae*）が，いま，現に存在していなくてはならないことになる。これは，しかし，ありえないことである。したがって，世界に始まりがあったということは，必然性をもって知識（*scire*）されうることがらであって，ただ，信仰によって把持されることがらたるにはとどまらない，そのように説く論である[57]。

このような主張に対してトマスは，*Summa theologiae* I-46-2をはじめ，いくつもの論考で反駁を試みている。けれども，*De aeternitate mundi*に述べられているところが直截だと思われる。そこでトマスは，つぎのように反駁している。

なるほど，この主張が提起している論，すなわち，世界が永遠この方，在りつづけているとすれば無限数のひとの魂が，不滅なるがゆえに，いま，現に存在していなくてはならないことになる，これはありえないことであり，したがって，世界が永遠この方，在りつづけているということもありえないという論は，斥けるにむずかしいものだと思われるかもしれない。それは，しかし，核心を突いた論ではない。というのも，神は，そうしようと意志するなら，果てしない以前に他のすべてを造り出し，しかし，ひとについてはある，かぎられた以前になってはじめて世にあらしめるという仕方で世界を造りえたのではないか。つまり，果てしない以前に造り出した世界を，しかし，神が欲する間，ひとのいないままにすることもなしえたはずではないか。そうであれば，世界に留まっているひとの魂は無限数になるとはかぎらない，そう，トマスは応じているのである[58]。

トマスのこのような言いようについては，ただし，聖書に物語られているところと，とりわけ『創世記』に物語られているところと調和させることができるだろうかと，ひとが訝しく感じても不思議ではない。神ならなしえないではないとされるところから力づくでひっぱり出した，間に合わせといわれかねない反論だと批判するひともあろう。いずれにせよ，トマスの述べるところが，さて，どれほど説得的か，首を傾げるひともすくなくないかもしれない[59]。ともあれ，トマスはこのように述べて，ボナヴェントゥーラの主張を斥けているのである。

---

[57] Bonaventure, *In II Sent*. d.1, p.1, a.1, q.2, Vollert（1964）, PP. 108~9. なお，ボナヴェントゥーラのこのような主張は*Summa theologiae* I-46-2において〈異論8〉として紹介されている。 Aquinas, Thomas, *Summa theologiae* 8, Gilby, A. ed. and trans., PP. 78~79,『神学大全　第四冊』，日下昭夫訳，63頁。

[58] *De aeternitate mundi*, Iussu Leonis XIII P.M. edita, P. 89, lines 297~308, Vollert（1964）, P. 25.

[59] なお，トマスのこのような言いように対してボナヴェントゥーラは，「…… そこに一人のひともいないままに世界が在るということはありえない。というのも，あらゆるものは，つまるところ，ひとのためにあるのだから（……〔the world〕would not be without there being men, for all things are in a certain way for the sake of man.）」と応じている。世界についての人間中心的な了解によりかかった応じ方だといってもよかろうか。Bonaventure, *In II Sent*. d.1, p.1, a.1, q.2. なお，引用は Vollert（1964）, P. 108によっている。〔〕内，筆者。

ところでトマスは，*Summa theologiae* I-46-2,「世界に始まりがあったということは信仰箇条であるか」という問への解答の〈主文〉につぎのような言葉を記してもいる。これまでに何度か先取りして触れてきた言葉である。この世界に〈始まり〉があったことは，神の啓示の告げるところであるのみならず，論証可能な真理でもあるかという問に，たとえ，教会の教えにもとるもの言いをすることになるとしても，いささかもたじろぐことなく向き合うようトマスをうながしたもの，それがなんであるかをうかがわせる言葉だといってよかろうか[60]。

> …… 人間にせよ，天にせよ，石にせよ，それが常に存在していたものでないということは，論証（*demonstrare*）されることのできないことがらなのである。同様にまた，それは，意志によって働く能動因の側からも論証されることができない。けだし，神の意志は理性をもって探索されえないものなのであって，それの可能であるのは，わずかに，神の意志することの無条件的に必然であるごときものごとの場合にすぎない。そうした性質のものには，然しながら，…… 神が被造物について意志したごときものごとは属しないのである。
>
> ただ，神の意志は，啓示によって人間に示されることができるのであり，信仰はこうした啓示に依拠している。だからして,「世界に始まりがあった」ということは, 信ぜられるべきことがら（*credibile*）であって，学的に認識さるべきことがら（*scibile*），ないしは，論証さるべきことがら（*demonstrabile*）ではないのである。こうしたことを考えておくことは次のようなことのために有益でもある。すなわち，もしかして何びとかが「信仰のことがら」をいっかど論証しようとして必然的ならぬ論（*rationes non necessarias*）を導入し，その結果，我々は「信仰に属する諸々のことがら」をかかる論拠の上に立って信じているのだと思われて，かえって，不信者たちに嘲笑の材料を提供するようなことになってはならないからである。

なおここで,「神の意志することの無条件的に必然であるごときものごと」としてトマスが認めるのは，先に第二節でも言及したように，神自身以外にない。また,「不信者たち」と呼ばれているのはマニ教徒，もしくはアルビ派のようにマニ教のながれを汲むといわれる異端の教団の信徒を指しているとみられる。ただし，稲垣が示唆するように，トマスの時代（13世紀半ば頃），イベリア半島にいたイスラム教徒を指しているのかもしれない。というのは，その頃，イベリア半島にあってイスラム教徒への宣教に従事していたペニャフォルドのライムンドゥスからトマスは，イスラム教徒に説き聴かせるに適した問答集を贈り届けることによ

---

[60] Aquinas, Thomas, *Summa theologiae* 8, Gilby, A. ed. and trans., PP. 78~81,『神学大全　第四冊』, 日下昭夫訳, 64~65頁。

って，宣教に献身しているドミニコ会の朋輩を支援するよう求められていたとも伝えられているからである[61]。なお，ペニャフォルドのライムンドゥスは，かつてドミニコ会の総長を務めたことのある修道僧である。

いずれにせよ，トマスは，不信者たちに，あるいは異教徒たちに嘲られ，かれらをキリスト教へ導こうとする朋輩達の献身を無為にしてしまいかねない，そうした「必然的ならぬ論」を，ないしは論理に瑕疵のある論をもてあそんではならない，わけても，「信仰に属することがら」について，もてあそんではならないと諭そうとしているのである。ひとの知性が「学的に」認識しうるのは，あるいは論証しうるのはどこまでか，それを冷徹に見定め，弁えるよう諭していると言うこともできよう。そして，この小論でわたし達が向き合っている問，〈始まりのない世界〉はありうるのであって，すくなくとも論理的には世界がそのようである可能性を否定することはできないのか，それとも，この世界に〈始まり〉のあったことは神の啓示の告げるところであるのみならず，論証しうる真理でもあり，したがってこの世界が〈始まりのない〉世界であること，それはありえないのかという問についていえば，

この世界は，〈始まりのない世界〉ではありえないと論証することはできない，
それゆえ，
ひとになしうるのは，あるいはゆるされるのは，この世界には〈始まり〉があったと信じること，それだけである

というのが，この弁えをけっしてないがしろにしなかったトマスのたどりついたところであった。

結びにかえて

ところで，トマスは，そこにこめられた意味が上記の引用文と重なり合う文章をいくつもの論考のなかに記している。たとえば，『創世記』1:6~8に「第二日の業」として語られていることば，すなわち

> 神は言われた。「水の中に大空あれ。水と水を分けよ。」神は大空を造り，大空の下と大空の上に水を分けさせられた。そのようになった。神は大空を天と呼ばれた。夕べがあり，朝があった。第二の日である。

[61] 稲垣（1992），117~119頁。

ということばの解釈をめぐってトマスが記した文章はそのひとつで，そこには，つぎのような一節が含まれている。*Summa theologiae* I-68-1,「蒼穹は二日目に造られたか」という問への解答の〈主文〉に記された一節である[62]。

> アウグスティヌスの教えているように，この種の問題にあっては，二つのことが遵守されなくてはならぬ。第一には，聖書の真理は，怯むことなく，あくまでこれを護持すべきこと。第二に，聖書はまたさまざまの仕方で解釈されうるものゆえ，たとえ「これが聖書の意味だ」と自分の信じていたところのものの偽り（*falsum*）であることが，確実な論拠（*certa ratione*）によって確立される（*constiterit*）にいたったとしても，なおかつ依然としてこれを敢えて主張して憚らないほど，それほどまでに絶対にその解釈に固執するごときは，如何なる場合にもあってはならないこと。それは，こうしたことが因をなして聖書が不信者の嘲笑を買い，かくして彼らの信仰への道が塞がれるにいたることがあってはならないからである。

聖書には，信仰に属することがら，もしくは，魂の救済にかかわることがらについて記されたことばばかりではなく，大空，ないしは天空のありようについて物語ることばが，さらには，天体の配置や運行について述べられたことばが随所に編み込まれている。そして，「第二日の業」としてつづられている文章がそうであるように，そうしたことばのなかには，どう解したらよいか，読むひとが困惑させられることがあっても不可解とはいえない表現が含まれている例がある。

また，これまでながく，疑問の余地のないものとされてきた解釈についてさえ，「確実な論拠」によって偽りであったと判明することばもある。それは，ひとつには聖書を綴った預言者や使徒達，たとえば，

> …… モーゼは素朴な民に語ったのであって，だから彼は，…… 感覚に顕わであるようなそうしたもののみを彼らに提示している

からである[63]。あるいは，すこし後に引用する文章においてアウグスティヌスも述べているように，預言者や使徒達は，天空のありようや天体の運行の様子についてことこまかに，かつ，精確に記述することを，あえて，避けたからかもしれない。そのような記述は，「素朴な民」

---

[62] Aquinas, Thomas, *Summa theologiae* 10, Wallace, W. A. ed. and trans., PP. 70~72,『神学大全　第五冊』，山本清志訳，62頁。

[63] Aquinas, Thomas, *Summa theologiae* 10, Wallace, W. A. ed. and trans., PP. 83~84,『神学大全　第五冊』，山本清志訳，72頁。

には近づきがたく，しかも，かれらの魂の救済に資するところ大きいとはいえないという配慮にもとづいて。

同時に，しかし，聖書のことばの物語るところについて教会がながく人びとに教え，説いてきた解釈と相容れない現象が，ときに見出されることがあったからでもある。たとえば，なめらかで完全，かつ不易であるか否か，始めも終わりもない円運動を行なっているか否かなど，天空に在るものを地上に在るものから隔てるとされる差異をめぐって，ながく教えられ，説かれてきたところと相容れない現象が見出されることがあった。ガリレオ・ガリレイの発見はそのひとつであり，しかも，大きな波紋を投じた例であった。

すなわち，「以前には永遠に人間の〔手の〕とどかぬ〔もの〕，せいぜい不確かな思弁や想像力にゆだねられていたものを，地上の被造物である人間が把握でき，人間の肉体的感覚がつかまえられる範囲の中に置いた」[64]器具，つまり《筒眼鏡（*perspicillum*）》を夜空に向けてなされた発見である。そのおり見出され，世に伝えられた現象ないし天空のあり様は，教会がながきにわたって教え，説いてきたところに，実は，偽りであったかもしれないという疑問をつきつけた。月面が凹凸だらけの粗いものであること，金星は大きさを変えながら，満ち欠けしているとみられること等，諸天体の実像が，そのようであるはずだと解され，教えられてきたあり様に，すなわち，なめらかで完全，また不易であるというあり様にそぐわないというほかないものであることが伝えられたのだから。

それらの発見を報じるガリレオ・ガリレイの『星界の報告』が世に問われたのは1610年のことであるが，トマスの文章は，そうした波紋の投じられることがありうることを三世紀以上も前に予見していたといってよいかもしれない[65]。

いずれにせよ，聖書に記されていることばの解釈に，また，教会がながく人びとに説き，教えてきたところに偽りがあったとみられることが，「確実な論拠」によって判明した場合，それにもかかわらず，その解釈や教えにかたくなに固執するのは，論理に瑕疵のある論をもてあそぶのと同様に，けっして，あってはならないことである。不信者たちに嘲りの口実をあたえ，ひいては，かれらをキリスト教へと導く道が塞がれてしまうおそれがあるからとトマスは諭しているのである。

こうしてみると聖書に記されていることばの解釈をめぐる問に，また，この小論で取り上げている問にいささかもたじろぐことなく向き合うようトマスをうながしたのは，今，みたように，また，前節でも述べたように，不信者たちをキリスト教へと導こうとする朋輩達の献身を実りのないものにしてしまうおそれがある，そのような論をもてあそぶ人びとに誤り

---

[64] アレント，ハナ，（1958），志水速雄訳，298頁。
[65] 筆者は，ガリレオ･ガリレイによって投じられた波紋について論じたことがある。西藤（2012），第三章。

を気づかせねばならないという使命感であったといえよう。そして，その使命感から産み出された論考やエッセイは，トマスが，ふところが深く，また，真なるものに深い思い入れを，畏敬の念といってもよいような思い入れを抱きつづけたひとであったことをよくあらわしている。卓越した知性の持ち主でありながら，あるいは，そうであればこそ，ひとが「学的に」認識しえないこと，ないしは論証しえないことが決してすくなくはないことをそのままに認めるふところの深さと真なるものに抱きつづけた畏敬の念，それが，わたし達をひきつけてやまないトマスのひととなりであったと思われてならない。そのようなトマスであってみれば，ドミニ・カネス（*Domini canes*）の，つまり，〈主の番犬〉のひとりではあっても，「必然的ならぬ論」に固執し，声高に吠え立てることはけっしてなかったにちがいない[66]。

なお，上記の引用文において「アグスティヌスの教えているように」とトマスが述べているのは，以下のふたつの文章を指していると思われる。前者は，マニ教徒に対して試みられた数多くの論駁の試み（『マニ教駁論集』）のひとつに記された文章である[67]。ここで数学者と呼ばれているのは，今日の天文学者のことといってよい。また，後者は，『創世記注解』の一節である[68]。なお，文中で「われわれの著者たち」と呼ばれているのは，いうまでもなく，モーゼをはじめ，聖書ないしは福音の書を書き綴った預言者達や使徒達である。

> 太陽と月のたどる行程を教示するために，わたしはあなた方の許へ聖霊をつかわせよう …… 福音の書のなかで，神はこのように語られたと解されることがあってはならない。というのも神が求めておられるのは，あなた方がキリスト教に帰依することであって数学者になることではないのだから。

> …… 天空の形相と形姿とがいかなるものであると，われわれの聖書に従って信ずればよいか，しばしば問題とされる。というのも多くの人々が頻繁にこうした事柄に関して議論しているが，われわれの著者たちは，至福なる生に益なきものとして，学ぶ者たちにこうした問題を扱うことを大いなる賢慮をもって省いてきた。…… ある人が聖書の語り方を理解せず，こうした事柄に関して，それ自体明証的に認識される理拠に反するように見えることを聖書のうちに見出したり，あるいは読まれるのを聞いたりするする場合に，その他のことで有益なことを聖書が勧め，物語り，宣べ伝えても，その人

---

[66] ドミニコ会の修道僧がこのように呼ばれるようになったについては，いくつかの伝聞がある。この修道会を立ち上げたドミニクス（*Dominicus*）の母が，口に炬をくわえた犬達が主を守護すべく世界を駆け巡るという夢をみたからというのが，そのひとつである。また，異端審問所の審問官が，ドミニコ会の修道僧から任用されることが多かったので，かれらは，「主への正当なる信仰の番犬」と呼ばれるようになったというのが，もうひとつである。ただし，単に，ドミニコ会修道僧を言い表す語，*dominicani*との語呂合わせから，*Domini canes*呼ばれるようになったということかもしれない。

[67] *De actis cum felice Manichaeo* I-10. なお，引用はLangford（1966）, P. 65によっている。

[68] *De genesi ad litteram* II-9-20,『創世記注解』，片柳訳，53~54頁。なお，片柳訳において天体と記されている語は，天空と解するのが適当だとみられるので，そのように訂正した。また，文意をたどりやすくするため，一部，語句を書き改めた箇所がある。

がもはや聖書を信じなくなるというようなことにならないように，手短かに次のことは言っておくおくべきであろう。つまりわれわれの著者たちは，天空の形状について真理であることを知っていたが，かれらを通して語りたもう神の霊は，救いに何ら益ないことを人々に語ろうとは望まれなかったのだと。

（成蹊大学名誉教授）

引用・参考文献

アウグスティヌス『マニ教駁論集，アウグスティヌス著作集7』，岡野　昌雄訳，教文館，1979。（*De actis cum Felice Manichaeo*, I-10.）

――――『創世記注解，アウグスティヌス著作集16,17』片柳　栄一訳，教文館，1994。（*De genesis ad litteram*，II-9-20.）

アリストテレス『トピカ』，村治　能就訳，岩波書店，1970。

アレント，ハナ，Arendt, H.（1958），*The Human Condition*, Illinois: The University of Chicago Press，志水　速雄訳『人間の条件』，中央公論社，1973。

稲垣　良典（1992）『トマス・アクィナス』，清水書院。

――――（1999）『トマス・アクィナス』，講談社学術文庫。

ファン・ステンベルゲン，フェルナンド（1955）『十三世紀革命』，青木　靖三訳，みすず書房，1968。

――――（1983）『トマス哲学入門』，稲垣　良典，山内　清海訳，白水社，1990。

ダンテ・アリギエーリ『神曲』，平川　祐弘訳，ギュスターヴ・ドレ画，河出書房新社，2010。

ディンツィンガー，H.編，シェーンメッツァー，A.増補改訂（1982）『カトリック教会文書資料集』，ジンマーマン，A.監修，浜　寛五郎訳，エンデルレ書店。

トマス・アクィナス『神学大全　第一册』，高田　三郎訳，創文社，1960。

――――『神学大全　第四册』，高田　三郎，日下　昭夫訳，創文社，1973。

――――『神学大全　第五册』，山本　清志訳，創文社，1967。

――――『神学大全　第二四册』，竹島　幸一，田中　峰雄訳，創文社，1996。

――――『神学大全　第四五册』，稲垣　良典訳，創文社，2007。

西藤　洋（2012）『枢機卿ベッラルミーノの手紙：科学思想史へのひとつの扉』，未來社。

――――（2016）「わたしのトマス・アクィナス頌：第一章　その生涯」，『成蹊大学経済学部論集』，第47巻第2号。

三浦　要（2011）『パルメニデスにおける真理の探究』，京都大学学術出版会。

Aquinas, Thomas, *Summa contra gentiles, Book two: Creation*, Anderson, J. F. ed. and trans., Notre Dame, Indiana: University of Notre Dame Press, 1975.

———, *Summa contra gentiles* II, 31~38, Vollert, C. ed. & trans., Vollert et. al. (1964), PP. 26~44.

———, *Summa theologiae* 1, Gilby, T. ed. and trans., NY: Blackfriars in conjunction with Mcgraw-Hill Book Company, 1964.

———, *Summa theologiae* 2, Mcdermott, T. ed. and trans., NY: Blackfriars in conjunction with Mcgraw-Hill Book Company, 1964.

———, *Summa theologiae* 8, Gilby, T. ed. and trans., NY: Blackfriars in conjunction with Mcgraw-Hill Book Company, 1967.

———, *Summa theologiae* 10, Wallace, W. A. ed. and trans., NY: Blackfriars in conjunction with Mcgraw-Hill Book Company, 1967.

———, *Summa theologiae*, Ia q. 46, a. 1~2, Vollert, C. ed. & trans., Vollert et. al. (1964), PP. 59~67.

———, *De aeternitate mundi, Sancti Thomae de Aquino, Opera Omnia XLIII*, Iussu Leonis XIII P.M. edita, Roma: 1976.

———, *De aeternitate mundi*, Vollert, C. ed. & trans., Vollert et. al. (1964), PP. 19~25.

———, *De potentia Dei*, q. 3, a. 17, Vollert, C. ed. & trans., Vollert et. al. (1964), PP. 45~58.

———, *Compendium theologiae*, 98~99, Vollert, C. ed. & trans., Vollert et. al. (1964), PP. 68~72.

Bonansea, B. M. (1974), The question of an eternal world in the teaching of St. Bonaventure, *Franciscan Studies* 34, PP. 7~33.

Bonaventure, *In II Sent*. d.1, p.1, a.1, q.2, Byrne, P. M. ed. & trans., Vollert et. al. (1964), PP. 105~113.

———, *Breviloquium*, II, 1, 1-3, Byrne, P. M. ed. & trans., Vollert et. al. (1964), PP. 116~117.

Brady, I. (1974), John Pecham and the background of Aquinas's *De aeternitate mundi*, Maurer, A. A. et. al. ed., *St. Thomas Aquinas 1274 ~ 1974 commemorative studies*, Toronto: Pontifical Institute of Medieval Studies.

Gallop, D. ed. & trans. (1984), *Parmenides of Elea*, Toronto: University of Toronto Press.

Gilson, E. (1948), *The Christian philosophy of St. Thomas Aquinas*, Shook, L. K. trans., London: Victor Gollancz LTD, 1957.

Maimonides, Moses, *The guide for the perplexed*, 2nd ed., Friedländer, M. ed. & trans., NY: Dover Publications, Inc., 1956.

———, *Moses Maimonides: The Guide of the Perplexed*, Pines, S. trans., the University of Chicago Press, 1963.

Mourelatos, A. P. D. (2008), *The route of Parmenides*, Las Vegas:

Owen, G. E. L. (1960), Eleatic questions, *The Classical Quarterly* 10, PP. 84~102.

Langford, J. J.（1955）, *Galileo, Science and the Church*, Michigan: The University of Michigan Press.

Siger of Bravant, *De aeternitate mundi*, Kendzierski, L. H. ed., & trans., Vollert et. al.（1964）, PP. 75~98.

Sorabji, R.（1983）, *Time, creation and the continuum: theories in antiquity and the early modern ages*, Ithaca, NY: Cornell University Press.

Tanner, N. P. ed.（1990）, *Decrees of the ecumenical councils* I, London: Sheed & Ward.

Tarán, L.（1965）*Parmenides: a text with translation, commentary and critical essays*, Princeton: Princeton University Press.

Vollert, C., Kendzierski, L. H. & Byrne, P. M. ed. & trans.（1964）, *St. Thomas Aquinas, Siger of Brabant and St. Bonaventure: On the eternity of the world*, Milwaukee, Wis.: Marquette University Press.

Wippel, J. F.（1977）, The condemnations of 1270 and 1277 at Paris, *The Journal of Medieval and Renaissance Studies* 7, PP. 169~201.

————（1981）, Did Thomas Aquinas defend the possibility of an eternally created world?（The *De aeternitate mundi* revised）, *Journal of the History of Philosophy* 19, PP. 21~37.